

【研究ノート】

ウイльта語口頭文芸の伝聞形式

—サハリンにおける言語接触の可能性—

山田 祥子

0 はじめに

ウイльта語は、サハリンの先住民族の一つであるウイльта族の言語である。系統的には、ツングース語（あるいはツングース諸語）とよばれる一連の言語に属し、なかでもナーナイ語やウルチャ語とは近い親縁関係にあるとされている（池上 1989: 1063、Doerfer 1978: 4）。一方、地理的にはサハリンの中部から北部に分布し、言語の系統を異にするニヴフ語やアイヌ語とも接触している。

さて、ウイльта語には固有の文字がないため、伝統的な文芸はすべて口頭で語り継がれてきた。そのようなウイльта口頭文芸では、その語る内容が第三者から伝え聞いた情報であるということを示す言語形式がしばしば見られる。以下、この言語形式のことを「伝聞形式」とよぶ。なお、言語学のカテゴリーとしての「伝聞」は「引用」の下位範疇と見なされる場合もあるが、ここでは藤田（2003）、Aikhenvald（2004）を参考に次の条件において伝聞を引用から区別する。すなわち、伝聞は言語的情報を受け入れて話し手自らのことばで伝えようとするものであり、情報源（もとの話し手）への言及を必要としない。

本稿では、口頭文芸の文体についてウイльта語とその近隣諸言語との比較対照を試みることにより、口頭文芸に見られる伝聞形式がサハリンの地域特徴となっているという仮説を提示する。これはサハリンに共存するウイльта・ニヴフ・アイヌの言語接触の可能性をさぐる初歩的な考察である。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、1 ではウイльта語の伝聞形式-ndA の特徴を整理する。2 ではウイльта語と系統的に近いとされるウルチャ語およびナーナイ語について、3 ではウイльта語と同じサハリンに分布するアイヌ語およびニヴフ語について、それぞれ口頭文芸に見られる伝聞形式を見ていく。こうした比較対照をもとに、4 では本稿の考察をまとめるとともに今後の研究へとつながる仮説を提示する。

《資料・表記について》

本研究は、池上（2002）『増訂ウイльта口頭文芸原文集』に収められている口頭文芸のジャンルのうち、散文のみで構成されるもの、すなわちテールグ（むかし話）、サフリ（おとぎ話）、童話の計 23 篇のみを対象としている。したがって、以下「口頭文芸」とよぶものには、歌謡や言葉遊び、および散文と歌謡が両方含まれるジャンルは含まない。

また、本稿に引用する例文の音韻表記・記号は、とくに注記しない限り各原典にもとづく。ただし、本稿の通し番号とともに以下に示す言語の略号を付記する。

Na. : ナーナイ語 Niv. : ニヴフ語 Ui. : ウイльта語 Ulc. : ウルチャ語
SA. : アイヌ語 (サハリン方言)

1 ウイльта語の伝聞

池上（2001）はウイльта語の「感嘆・疑問その他の語尾」の一つとして「-nda」を挙げ、

「伝聞を表わす語尾。「……だそうだ」「……だと (いう話だ)」の意。」(池上 2001: 97) であると記述した。以下、この伝聞の語尾「-nda」の特徴について口頭文芸テキストにもとづく筆者の考察をまとめる。

1.1 形式的特徴①：母音調和と感嘆融合形

本節では、ウイльта語の伝聞形式「-nda」について、おもにその音韻に関する二つの特徴を挙げる。

第一に、母音調和による音交替である。ウイльта語の母音調和規則 (cf. 津曲 1988: 744) にしたがって、「-nda」は先行する語幹の母音体系に応じて -nda ~ -ndo ~ -ndə ~ -ndø という 4 通りに交替する。そこで以下では交替する母音を A で代表させ、-ndA と表記する。このような母音調和による音交替の特徴は、この形式-ndA が前の語と結合する付属形式として「語尾」の体系に含まれることを示唆している。

また、音韻的特徴の第二として、感嘆融合形にともなう上昇調イントネーションが挙げられる。ここでいう感嘆融合形とは池上 (2001: 91, 101) の用語で語尾-ndA から派生する-ndAA あるいは-ndAmAA を指し、池上 (2002) に所収されている口頭文芸テキストでは-ndA の用例のうち 8 割以上がこのかたちをとる。そして顕著な特徴として、この感嘆融合形-ndAA / -ndAmAA は上昇調のイントネーションをともなって高く発音される。例として下に抜粋するテキスト(1)を参照されたい。なお、ここでは各文末に池上 (2002) 付属 CD からの聴取にもとづくイントネーションの記号を挿入する。(↗: 上昇調、→: 平坦、↘: 下降調)

(1)ウイльта語：池上 (2002: 49-52) より、サフリ (おとぎ話) の冒頭・末尾部分

(1.1) goropčinnee むかしの人が	saxurixani おとぎ話した	saxuri <u>ndamaa</u> . ↗ おとぎ話だとさ。	(1.2) daa xajilaččee. → ダーハジラッチェー。
(1.3) geeda 一匹の	suli きつねが	namu 海	kirraani 岸を
			doəroxon <u>indaə</u> . ↗ あさってあるいていたんだと。
(1.4) wasaa ワサー	gasa 鳥が	sindaxan <u>indaa</u> . ↗ 来たんだと。	(1.5) sullee きつねを
			taapalarraa つかんで
nammoo taisai 海を	orokčini <u>nda</u> . ↗ 沖の方へ つれて行ったんだと。	[中略]	(1.6) čikəə それまで
goropči むかしの	saxuri. ↘ おとぎばなしは。		biččini <u>indaə</u> . ↗ だったんだと、

※例文中の太字+下線は伝聞形式に当たる部分を表わす。以下、同様。

1.2 形式的特徴②：文中における位置

次に-ndA の形態的特徴として、語の末尾につくということが挙げられる。例として上掲(1.3)を参照されたい。感嘆融合形-ndAA のつく語は sinda-xa-ni-nda (動詞語幹「来る」完了形動詞-3 人称単数-伝聞) と分析できる。このように、伝聞の語尾-ndA およびその感嘆融合形は語のもっとも末尾にたち、派生や屈折にかかわる他の語尾よりも前にたつことがない。

さらに、統語的特徴として、文の述語にあたる語につくということが挙げられる。これは上掲の(1.1)や下の例文(2)のように、動詞以外の自立語が述語となる場合も同様である。(1.1)では名詞 saxuri 「おとぎ話」に伝聞の感嘆融合形-ndamaa、(2)では形容詞 daaji 「大きい」に-nda がついている。

(2) *Ui. aagduma* *puttəni* *ambaa* *daajindaa.*
 兄の方の 子は すこし 大きいんだと。(池上 2002: 45)

ウイルタ語の基本語順は日本語と同様に SOV 型とされ、述語は文末にくるのが原則である。したがって、上述の形態・統語的特徴とウイルタ語の基本語順の原則とを掛け合わせると、概略-ndA の位置は文末であると結論づけられよう。ただし、ウイルタ語口頭文芸では、述語の後ろにそれを補足する成分がたつ「後置文」が全体の約 4 分の 1 を占める (山田 2007)。このような場合でも語尾-ndA は述語の末尾に固定されるため、たとえば上掲(1.6)のように文の中間部に現れることもある。

1.3 用法の特徴：口頭文芸における出現頻度

次に、用法上の特徴について述べる。本研究の対象とするウイルタ口頭文芸 23 篇には、地の文（登場人物のせりふ以外の文）1636 文が含まれる。このうち、伝聞の語尾-ndA が述語につく文は 782 文（全体の 48%）である。また、本稿では詳述しないが、語り手によっては、推量を表わす小詞 *taani* を伝聞として用いる文が地の文の 10% を占める。したがって、伝聞の語尾-ndA と小詞 *taani* の伝聞用法を合わせると、（語り手による差はあるが）全体の約 6 割が伝聞形式で語られているということになる。このような伝聞形式の出現頻度の高さは、上掲のテキスト(1)を概観しても確認することができるだろう。

また、伝聞形式は冒頭・末尾部分などへの偏りはなく語り全体を通して広く分布する。なお、文芸ジャンルによる出現頻度や分布の差があるのかも気になるところである。しかし、池上（2002）に収録されている資料ではサフリ・童話の語り手が特定の一人に限られているため、ジャンル間の差が真にジャンルによるものなのか、語り手によるものなのかは特定できない。

このような出現頻度の高さ、および分布の広さは、上述の上昇イントネーションが加わることによって語り全体に韻律的效果をももたらしている。つまり、-ndA の感嘆融合形にともなう文末上昇調と、後置文などの文末下降調が折り重なって、語りの平板さが避けられていると考えられる。その意味で、伝聞形式はウイルタ語口頭文芸の語りの重要な文体的特徴となっている。

2 ウルチャ語・ナーナイ語の伝聞

前節では、ウイルタ語の伝聞形式-ndA の特徴を概観した。次に本節では、系統的にウイルタ語と同じツングース語第Ⅲ群に分類されるウルチャ語・ナーナイ語 (cf. 池上 1989: 1063) の伝聞形式とその特徴について、筆者の一考察を述べる。

2.1 ウルチャ語

これまで筆者がウルチャ語の口頭文芸テキストを調べたところ、上述のウイルタ語の-ndA のような伝聞を明示する語尾は見られなかった。ただし、それに代わるものとして(3)のように *wəndə* という語が見られる。これは、逐語的に「という」と訳され、その文の表わす内容全体が伝聞であることを標示している。

(3) *Ulc. tu* *ŋəŋəni* *wəndə.*
 そうして 行く という。(風間 2002a: 19)

この wəndə 「という」は、形態的に「言う」を意味する動詞 wən- の 3 人称・定動詞現在形と分析される。この動詞 wən- 「言う」はしばしばせりふの引用に用いられ、次の例文(4)のように引用部の直後に置かれる。なお、(4)の wəndiini は動詞 wən- 「言う」の 3 人称単数・形動詞現在形と分析できる。

(4) *Ulc.* “əñəə əji soŋgoro,” wəndiini,
「お母さん、泣くな、」 と言う、(風間 2002a: 49)

つまり、ウルチャ語の伝聞は引用の動詞 wən- 「言う」から派生する迂言的な形式によって表わされるということができよう。

しかしながら、資料全体では(3)のような伝聞の用法はごくまれにしか見られない。たとえば、下の(5)に冒頭部分を抜粋するウルチャのニグマー（ウイлтаのサフリに相当する、架空の物語）では、とりたてて伝聞を明示することのないまま語りが進行する。

(5)ウルチャ語：風間（2002a: 17）より、ニグマーの冒頭部分

daa xajilatı um gasakaan-daa um biruudu biçini, ñusal. gəə tı biruudu biçini ñı
ダーハジラッテ、ある村人たちが、ある町にいた、人々たちが。さあその町にいたのだ、人、
manganı-guni, ñı largı ñı pəskin gərəə ñı saarını ñawjaka biçini.
強い人なのだ、人、すばらしい人、人、強い人、おおぜいの人々が知っている若者たちがいた。
sugdata-daa, dəgdəi gasa-daa čupal waarı ~ sumii sugdatawa-daa čupal waarı, xamataanı-daa
魚も、空飛ぶ鳥も、全て狩る、飛び跳ねる魚をも全て捕る、いかなるものも、
usəltəwə-dəə čupal waarı biçini tı, məən gasančisal čupa~l tı tı jəpəwənçini biçin.
獣をも全て獲るのであった、彼は、自分の村の人々全員をそうして食わせ養っていたのだった。

※ -は接語境界、~は伸ばす音を表わす。

2.2 ナーナイ語

次にナーナイ語の口頭文芸テキストを調べると、やはりウイлта語の伝聞の語尾-ndə のような付属形式は見られず、前節のウルチャ語と同様に「言う」を意味する動詞 un- の 3 人称・定動詞現在形 undə が伝聞を標示する。(6)はその一例である。

(6) *Na.* təi-lə piktəəri tui uʃjal undə.
その彼らの 子どもは そうして 育つ という。

(風間 2005a: 74 ; -は接語境界)

この動詞 un- 「言う」もまた、しばしば下例(7)のようにせりふの引用に用いられる。

(7) *Na.* mərgən undiini, “gaaki-a,” undiini, “nadan
ムルグンは 言う、 「からすよ、」 と言うのだ、 「七匹の
kuəjən jilimba buurəpu-ə” -m.
雌犬の 頭を やろうじゃないか、」 と。 (ibid. 31 ; -は接語境界)

このように、ナーナイ語では伝聞の表現を引用の動詞「言う」から派生する迂言的な形式 undə が担っているということがわかる。これは前節で見たウルチャ語とほぼ同様である。

ただしウルチャ語と異なる点として、少なくとも筆者の調べた資料中では伝聞形式 undə の出現頻度は比較的高い。たとえば下の(8)に抜粋するニグマーでは、冒頭部分だけでも 2 例見出される。

(8) ナーナイ語：風間 (2005a: 21) より、ニグマーの冒頭部分

ə~ŋ undiisi gilŋətuʃi əukəmuliə balʃixaçi. waasoana mii niŋmaŋkimbi gəə
 ギルガトウと 母方の叔母さんとで 暮らしていた。少し前に 私は この話を物語ったよねえ、ああ
 ŋoančiani. əsi tui bii~, tui balʃii tui balʃial **unda**.

彼らに語ったのだけ。今 そうしている、そうして 暮らしている、そうして 暮らしているという。

əŋ ŋilŋətu mənə xaiwa-daa xəm taini-tanii tɔi əukəni-təni mənə uiləi-dəə
 ギルガトウは 自分で 何でも 全て するのだ、その 叔母さんは 自分は 縫い物をして、
 uiləi. ə~ŋ siaori pujuurii, pujuurii...siagoji bargičixan, mənə

ずっと縫い物をしている。食事は 煮るが、煮て、自分らの食事を 準備したなら、自分は
 uiləmi oçogoi. tui biə **unda**.

また縫い物をするために 座る。そうしている という。

※ -は接語境界、~は伸ばす音を表わす。

こうした **unda** の用法について、風間 (2005b: 141) は「3 人称の事態を直接体験として語ることはできないので、引用として語っているもの」であると説明している。つまり、ナーナイ語の口頭文芸では「言う」を意味する動詞 **un-** から派生する **unda** によって語り全体が一種の引用文のようになっているといえる。

2.3 小括：ウイлта語とウルチャ語・ナーナイ語の比較

以上、本節ではウイлта語と系統関係の近いウルチャ語・ナーナイ語の伝聞形式について見てきた。上述のウイлта語の伝聞形式-ndA と比較すると、以下の考察が得られる。

第一に、かたち上の類似である。*Ui. -ndA/Ulc. wəndə/Na. undə* の音韻を比較すると、とりわけ子音の部分で類似していることは明らかである。また、いずれも述語の直後に置かれる点で統語的な位置も共通する。本稿では詳述を避けるが、証拠性意味論にもとづく機能的な考察からも、筆者はこの3者が同源であると推測している。すなわち、ウイлта語の-ndA も動詞 **un-** 「言う」から派生した可能性が高い。

しかしながら、考察の第二点として、*Ui. -ndA* が前の語との母音調和を示すところにより語尾として認められるのに対し、*Ulc. wəndə/Na. undə* はあくまでも自立的な一語である。この点で、ウイлта語の伝聞形式は他よりも文法化の程度が高いことがうかがえる。

そして、第三点として、とりわけ口頭文芸における用法上の相違が注目される。上述のように、ウイлта語では語りの大部分が伝聞形式で表わされるだけでなく、感嘆融合形にともなうイントネーションの上昇によって高く発音され、その存在感は大きい。他方、ウルチャ語・ナーナイ語の伝聞形式に関して、その出現頻度については今後より広範囲な検討を要するが、少なくとも上昇イントネーションをともなう例は見られず (cf. 風間 2002a, 2002b 音声 CD)、一様に低く弱く発音される傾向がある。

3 アイヌ語・ニヴフ語の伝聞

本節では、ウイлта語と系統は異なるが、同じサハリンで地理的に近い言語であるアイヌ語 (サハリン方言)、およびニヴフ語の伝聞形式とその特徴について、筆者の一考察を述べる。

3.1 アイヌ語

アイヌ語のなかでも南サハリンに分布するサハリン方言は、地理的にウイлта語ときわめ

て近い位置にある。その文法を概説する村崎（1979: 57-58）によると、この方言では自分が直接体験した実感ではなく人から聞いて知ったことを述べる伝聞の表現として助動詞 **manu** がよく用いられる。そして、これは(9)のように文節末に置かれ、しばしば **ucaskuma**（民話）にその例が見られるという。

(9)SA. tan nay 'etokota pirika too 'an **manu.**
 この 川の 川上に きれいな 湖が ある ということだ。

(村崎 1979: 58)

そこで民話テキストを調べると、事実この **manu** という形式が多く目に付く。その頻度は語り手によって差があるが、下の(10)はそのなかでも出現の多い例の一つである。なお、村崎（1979）は **ucaskuma** にジャンルを限定しているが、村崎（2001）では、**ucaskuma** と並ぶサハリンアイヌの散文説話のジャンル **tuytah**（昔話）にも **manu** が用いられる例が認められる。

(10)アイヌ語サハリン方言：北原ほか（2003: 11-12）、**ucaskuma**（民話）の冒頭部分

husko ohta ene an ucaskuma an. yayresuupo cehkoyki kusu kara **manu**yke ene kii **manu.**
 昔、こんな言い伝えがあった。ヤイレスーポが魚を捕ろうとしたというが、このようにしたのだという。
 yayresuupo husko ohta nean siroma kamuy enkoru aynu, enkoru kamuy. yayresuupo nah an_eyee.
 ヤイレスーポは昔、立派な神であって半分は人間、半分は神である。ヤイレスーポという名であった。
 nean yayresuupo cehkoyki kusu kara **manu**yke tani cehkoyki orunpe yaykarakara **manu.**
 そのヤイレスーポが魚を捕ろうとしたというが、さて漁の道具を用意したという。
 ke ene kii **manu.** konkaani maareh sineh kara, orowa sirokaani maareh sineh kara.
 それは次のようなものだったという。金の魚鉤をひとつ作り、それから銀の魚鉤を一つ作った。
 teh tani, ceh kii, ceh kii **manu** ...
 そしてそれから、漁をした、漁をしたという。...

ここで注目したいのは、この助動詞 **manu** がある文はほぼ例外なく文末にかけて上昇調のイントネーションで語られることである（付属 CD の聴取による）。そのため **manu** の部分が高くはつきりと発音される。これは、上述のウイルト語の語尾-ndA が上昇調のイントネーションをとまなうという事例を想起させる。

ところが、同じアイヌ語でも北海道方言ではこの助動詞 **manu** はまれに、しかもきまったところにしか現れない（田村 1988: 44）。また、北海道のアイヌ口頭文芸では、語り手が主人公の身の上を主人公になりかわって物語る特殊な一人称形式が知られており（斎藤 1993: 61, 中川 1997: 216-228）、民話を上掲(10)のような三人称の伝聞形式で語るという習慣自体が一般的でないのではないかと考えられる。今後の検討次第で、もしこれを確認できるとすれば、少なくともアイヌ語では口頭文芸の（三人称）伝聞形式がサハリンという地域に特有のものであるといえるだろう。

3.2 ニヴフ語の伝聞

ニヴフ語の文法を概説する Gruzdeva（1988: 57）は、アムール方言およびサハリン東部の方言において「伝達される情報の出どころがわからない場合、問題の行為は-furu という特別な小詞をとまなう定動詞によって表わされる」と指摘した。同書の文法注記では、この小詞-furu を前の語と結合する「伝聞の小詞」（あるいは「再話の小詞」；“re-telling particle”）と分析し、“it is said”の訳が当てられている。また、Savel'eva & Taksami（1970: 406）の辞書的記述では、

「furu」という語彙項目について「～であった；～だとさ（物語の語り手の言い回し）」(vot tak bylo; skazano tak (vyrazhenie skazitelei)) と説明されている。その形態的位置づけ（すなわち、前の語に結合すると見るか否か）については見解が分かれるところだが、少なくとも上の2つの先行記述からは、この形式が物語のなかで伝聞を表わすものであることが仮定される。

そこで、口頭文芸テキストを調べたところ、サハリン北部で採録されたアムール方言の資料 (Shiraishi & Lok 2002, 2003)、サハリン東部出身の話者から採録されたサハリン方言の資料 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 HP) から furu の用例を確認できた。いずれも、形態的には独立する一語として表記され、伝聞の意味が当てられている。(11)は後者からの転載（一部、日本語訳を補足）である。なお、ここでは furu に対応する日本語訳も太字＋下線で示す。

(11)ニヴフ語サハリン方言：「鍋の残りを欲しがる魔物」全文（上：原文、下：和訳）

in q^hoəl ur^ht, hu milkyun. q^hoəl ur^ht, niyvdox p^hr^həŋa, q^hot^huəar^ht, juyt, kur^hkurəar^ht hunvd. niygun, q^hot^huəar^ht, in xerdⁱ qavrvəar^hd. nud vəŋ lu, nud lu, k^hlə sit hundⁱt, k^hlə sit hundⁱt. p^hr^hət hu vəŋ yet r^horvit iyr^h irox vit ijtot, q^hotot, humpat ozt, hu vəŋ nr^həŋa, nud luvluv lo, nud lo, ranftⁱ sik ara aspiŋ barar^h, r^hamdⁱgūt vər^hk irox vit ijtad lo? luvluf malkod, nud vər^hk het ijd lo? luvluf malkorad **furu**, hud. zuŋa mraŋ **furu**. vəŋ tⁱutot, iys... nud avr^h jet iŋŋa, mraŋ **furu**. lədi qavrvəar^ht, həmdⁱ xadata, kot^t nudlo, het iŋŋa nan, q^hoəl urd **furu**. həmdⁱdra, həmdⁱk ni ax k^her^h məd. sik ra tu t^həlgur^h.

彼らは善い心を持っているのだ、この化け物たちは。心が善いのだ。人間のところへ来るときは、黙って入って来て、まっすぐ立っている。人間たちもまた、黙ったまま、彼らに話しかけたりはしない。鍋だとか、そんなものを、外に置いておく。外にこう置いておくのだ。やって来て、この鍋を取って持って一緒に川に行って食べてしまう。(ひとびとは)寝て翌日起きてその鍋を見ると、煮詰まったものなの、焦げつきだのが、いつもまるで喉に詰まりそうなものだが、どういうつもりか、川へ行って(化け物が)食べてしまったのか。煮詰まったものがたくさんだが、誰かが煮て食べてしまったのか。(なくなっている)。煮詰まったものがたくさんあった(筆者補足：**そうだ**)が、それを洗うと(化け物が)嫌がった**そうだ**。鍋を洗ってしまうと、一緒に…何を煮て食べるのでも、洗うと嫌がった**そうだ**。(煮詰まりは)嫌がりもしない。そんなふうだった。鍋を下げて行って、何でも煮て食べると、親切にしてくれるのだ**そうだ**。こんな話だ。こんな話を私は以前聞いたのだ。この昔話はこれでおしまだよ。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 <http://www.ling-atlas.jp/r/tale/show/17>

同 HP で配信されている音声によると、(11)の資料では furu の部分ではっきりと上昇調のイントネーションを確認できる。この傾向は他の資料でも認められるが、それがどこまで一般的かは今後の検討課題としたい。

3.3 小括：ウイルタ語とアイヌ語、ニヴフ語との比較

以上、本節ではウイルタ語と地理的分布の近いアイヌ語、ニヴフ語の伝聞形式について見てきた。

まず、ウイルタ語を含めたサハリンの3言語では、先行研究においてすでに口頭文芸との関連から伝聞形式が指摘されている点は興味深いことである。その形式は *Ui. -nda* / *SA. manu* / *Niv. furu* と音韻・形態的にはまったく異なる。しかしながら、いずれも述語の直後ないし文末に現れる点では、統語的な位置づけは類似しているといえよう。また、とりわけ上昇調のイントネーションを加えて高く発音される傾向があることは、本研究では大陸側のウルチャ語・ナーナイ語には見られなかったサハリンの3言語の共通点である。

これら伝聞形式の用法に関しては、使用頻度や分布などについて今後より多くの資料から検

討していく必要がある。しかし、少なくともアイヌ語においては口頭文芸における *manu* の用法がサハリンに特有のものである可能性が高い。

4 おわりに

本稿の論旨は以下のとおりである。大陸側に分布するウルチャ語・ナーナイ語の伝聞形式は、動詞「言う」の変化形 *Ulc. wəndə*/*Na. undə*として今日もその原型をとどめているのに対し、ウイльта語の伝聞形式は *-ndA* という語尾として文法化し、口頭文芸の文体として重要な役割を果たしている。一方、同じサハリンに分布するアイヌ語サハリン方言およびニヴフ語では口頭文芸において *SA. manu*/*Niv. furu* が伝聞形式として用いられることがすでに指摘されており、文末におかれて上昇調のイントネーションをとまなう点ではウイльта語の *-ndA* との類似性が認められる。

以上の考察から、筆者は口頭文芸における伝聞形式がサハリンの地域特徴になっているのではないかという見通しを立てている。すなわち、ウイльта語口頭文芸の伝聞形式とその用法がサハリンにおけるニヴフ・アイヌ・ウイльтаの言語接触によって確立したものであるという仮説である。これは、形式そのものの借用ではなく伝聞というカテゴリーの借用ということもできよう。ウイльтаは、ニヴフまたはアイヌの口頭文芸の語り方から影響を受け、次第に動詞「言う」を「伝聞の語尾」として変化させ、生産的に用いるようになったのではないだろうか。上昇イントネーションなどの類似は、こうした影響関係に起因するのではないだろうか。

以上に述べたことは、現段階ではあくまでも仮説であり、今後の研究への問題提起にすぎない。しかし、もしもこの仮説が成り立つとすれば、サハリンにおける言語接触、ないし人と人との交流が口頭文芸を介しても行われていたと考えることができる。この検証には、物語の内容そのものの貸借の有無や、3 民族の接触の度合い（バイリンガルがいたかどうか等）、口頭文芸が語られる場などについても幅広く調べていく必要がある。また、仮にこの考え自体は見当外れだったとしても、本稿で描いた言語接触の構図を「伝聞形式」だけでなく言語のさまざまな側面に適用していくことは今後の研究に有用であると筆者は考えている。それによって、サハリンにおける民族・文化の交流のようすが少しでも明らかになることを期待する。

註

本稿は、北海道民族学会 2007 年度第 2 回研究会（2007 年 12 月 16 日）における口頭発表（同題）の要旨に代えるものである。本研究に際し、とくにニヴフ語、アイヌ語について貴重なご指摘を下された白石英才先生、高橋靖以氏、ならびに内容全体に対して有意義なコメントを下された津曲敏郎先生をはじめ、民族言語学ゼミ、ならびに北方文化論研究室の皆様は心より感謝申し上げます。

参考文献

池上二良

- 1989 「ツングース諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』1: 1058-1083, 三省堂.
- 2001 「樺太のウイльта語の感嘆・疑問その他の語尾について」『ツングース語研究』94-109, 汲古書院 [初出: 1994『北海道方言研究会 20 周年記念論文集: ことばの世界』158-167, 北海道方言研究会].
- 2002 『増訂ウイльта口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集 16）文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-013, 大阪学院大学情報学部.

風間伸次郎

- 2002a 『ウルチャロ承文芸原文集』(ツングース言語文化論集 20) 文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-022, 大阪学院大学情報学部.
- 2002b 『ナーナイの民話と伝説 7』(ツングース言語文化論集 18) 文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-020, 大阪学院大学情報学部.
- 2005a 『ナーナイの民話と伝説 8』(ツングース言語文化論集 27) 千葉大学文学部.
- 2005b 「ナーナイ語の疑問詞による反語表現について」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』12: 129-163, 北海道大学大学院文学研究科.

北原次郎太・田村雅史・田村将人・丹菊逸治・田村すゞ子(共編)

- 2003 『アイヌ語樺太・名寄・釧路方言の資料: 田村すゞ子採録: 藤山ハルさん・山田ハヨさん・北風磯吉さん・徹辺重次郎さんの口頭文芸・語彙・民族誌』文部省特定領域研究(A)環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-039, 大阪学院大学情報学部.

斎藤君子

- 1993 『シベリア民話への旅』平凡社.

田村すゞ子

- 1988 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』1: 6-94, 三省堂.

津曲敏郎

- 1988 「ウイльта語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』1: 744-746, 三省堂.

中川裕

- 1997 『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー190, 平凡社.

藤田保幸

- 2003 「伝聞研究のこれまでとこれから」『月刊言語』32(7): 22-28, 大修館書店.

村崎恭子

- 1979 『カラフトアイヌ語: 文法篇』国書刊行会.
- 2001 「B.ピウスツキ収録の昔話 11 編と民話 1 編: 再転写によるアイヌ語テキストと日本語訳」村崎恭子(編)『少数民族言語資料の記録と保存: 樺太アイヌ語とニヴフ語』(環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-009) 91-135, 大阪学院大学情報学部.

山田祥子

- 2007 「ウイльта語後置文の機能論的分析」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』14: 87-102, 北海道大学大学院文学研究科.

Aikhenvald, A.Y.

- 2004 *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

Doerfer, G

- 1978 "Classification Problems of Tungus", *Beitraege zur Nordasiatischen Kulturgeschichte, Tungusica*, Band I, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Gruzdeva, E.

- 1998 *Nivkh* (Languages of the world/ materials 111) Muenchen: Lincom Europa.

Savel'eva, V. N. & Ch. M. Taksami

- 1970 *Nivkhsko-Russkii Slovar'*: *Svyshe 13,000 slov*, Moskva: Sovetskaya Entsiklopediya.

Shiraishi, H. & G. D. Lok (eds.)

- 2002 *Sound Materials of the Nivkh Language 1: Folktales Recited by V. F. Akiljak - Ivanova*, (Endangered Languages of the Pacific Rim A2-015), Suita: Osaka Gakuin University.

- 2003 *Sound Materials of the Nivkh Language 2: Folktales and Songs of the Amur Dialect*, (Endangered Languages of the Pacific Rim A2-036), Suita: Osaka Gakuin University.

参考ホームページ

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

「民話資料」『北東ユーラシアの言語文化』<http://www.ling-atlas.jp/> (閲覧日 2007/12/04).

(やまだ・よしこ／北海道大学大学院)